

俳句実作と鑑賞・初級

担当講師 藤本 美和子（俳人）

コインロッカー

藤本美和子

団栗の根を下ろしたる遠霞
築山に熊手をつかふ遅日かな
荷車のとほり抜けたる花埃
梅雨に入る卵の殻を剥きながら
さみだるるコインロッカー一段目

白猫

伊藤 勲

新しき楽譜の匂ひ夕永し
無口なる船頭のゐて草の花
ひと呼吸おいて座につく霜の朝
鳥声に耳澄ます春遠からじ
白猫の大樹見上ぐる春隣

つるし雛

上野ノエル

その中の釣果自慢の桜鯛
雨後の風吹きぬけてゆく蚊遣香
椿の実小学校に満つる声
実をひとつ鳥に残して柿落葉
海風もすこしやさしきつるし雛

巡礼の鈴

緒方阿久亜

桐の花巡礼の鈴鳴りにけり
大粒の雨切つて来る燕
ひと瓶に溢るる梅酒漬けにけり
花芙蓉ふみ待つ午後の長きこと
それぞれの窓に影あり日短

ポンポン船

尾崎晃男

尊徳と金木犀に出会ひけり
井戸端の無花果だけが残りけり
小さき手はグーを出したり枇杷の花
春隣り水面を割つて鯉進む
冬かもめポンポン船を引き連れて

夏来る

長村光英

一匹の目力強き桜鯛
レコードの微かなノイズ夏来る
夏めくや紙飛行機を飛ばす人
じやんけんをする子らがゐて草の花
猿ぼぼの弥次郎兵衛揺れ夜長し

門火

小島ただ子

かんなぎの浅沓の音柳若葉
水昏れてより船宿の門火かな
夕野分学僧達の小鉤かな
枇杷の花母の祥月命日よ
沼杉の気根の数や水澄める

梅探る

佐藤 健

短靴に横一線の春の泥
初七日の頭垂れたる庭桜
藁の香の菰を開けば桜鯛
大黒天坐すあたりの梅探る
枝伝ふ鳥の影濃し春近し

彼岸

高宮早苗

花桶を持ちすれ違ふ彼岸かな
雨に濡れ葉に隠れたり椿の実
子どもらは土管で遊ぶ草の花
徳川の葉草園に秋の蟬
白鷺の梢に向かふ雨の池

流木

笹淵正保

雨止みて俄かに匂ふ四葩かな
流木に舟虫走る朝の浜
海峡に夕日のかかる小暑かな
足太き赤子笑ふや柏餅
西陣の杼を操る手日短か

一葉落つ

高橋とし子

大谷石登り切りたる蜥蜴の子
幾何学の問題ひとつばつた跳ぶ
落雁の木型の艶や一葉落つ
鉄門の閉まる音して野分かな
後ろ手に結ぶエプロン春近し

遠き雲

谷口蕪舟

うさぎ跳び百回出来て日永し
校庭の小さき足跡春の泥
水桶の底に揺れるる胡瓜かな
遠き雲見つつビールを注ぎにけり
はたはたが跳びゆく先の墓石かな

枇杷の花

照田宥子

晩学や揺らぎどほしの白き萩
深みゐる毬藻の色や鳥渡る
日曜は夕餉の早し枇杷の花
黒豆に艶の出てきて深雪晴
手術待つ蛍光灯の余寒かな

眉月

永岡美砂子

子規庵の軒先ひくし蚊遣香
アルプスの闇に残りし虫の声
眉月の白くなりたる野分あと
袋からとり出す烏瓜ふたつ
探梅行鳥鳴くはうへ向かひけり

種を採る

土橋モネ

鶯のこゑにたたずむ枢かな
かたかごの花の満ちたる葬後
鷹渡る空となりたる天守台
朝顔の蔓の強さよ種を採る
図書室の灯にいそぐ落葉かな

暮早し

中村かずお

悉く黄菊の花の小径かな
夕雲のひとつ崩れて烏瓜
軒低き路地が抜け道枇杷の花
仄青きスカイツリーや暮早し
齋粥いつもの席にうち揃ひ